ともに担い　ともに築く　女と男の情報誌

ねっとわぁく

2015/3/11 Vol.65

私と防災

私の思いや経験を、あなたに伝えたい

静岡県

私と防災

1970年代、「東海地震説」が発表された。以来、静岡県民は30年以上も地震への不安を抱いてきた。しかし、歳月が流れるなかで、阪神・淡路大震災や東日本大震災が起こり、日本中で防災意識が高まるなか、静岡県民の防災意識は十分と言えるだろうか。

2013年、第4次地震被害想定でM9クラスの南海トラフ巨大地震の被害想定が発表された。被害想定の大きさにあきらめの心境を抱く人も多いだろう。

大地震が起きた際は、自分の身は自分で守ることが前提であり、行政の支援に頼ることは難しい。どのようにして自分の命を守ったらいいのか、家族の命は守れるのか、地域での生活はどうなるのだろうか。多くの不安が生まれるなか、自助・共助の理念がクローズアップされてきた。防災への取り組みに積極的にかかわる人が増え、輪は広がっている。今の自分にできる防災、誰のためでもない自分自身の命を守る防災を考えたい。

65号は「私と防災」をテーマに特集を組んだ。巻頭言は、静岡大学教授・池田恵子さんにお願いした。次に、災害や防災を考える上で重要な「地域」「リーダー」「教育」「ボランティア」「女性」をキーワードに県民の活動を紹介する。男女の性別役割を見直し、思わぬ成果を得た自主防災組織。防災体験学習を通して生徒の防災意識を高める学校。津波から命を守るために訓練を重ねる自治会。災害ボランティア活動を支えるコーディネーターなどである。

つい先延ばしになりがちな「私と防災」だが、今日からできることを提案したい。まずは、「非常持ち出し」や「非常食」を作ってみることから始めてみたらどうだろうか。意識せずに身についた時、自然にできるようになっていた時、一人ひとりの防災力は向上しているはずだ。自分の命を人任せにしないためにも、多くの人に自分のこととして防災を考えてもらいたい。そして今号がその足掛かりになればと願う。

巻頭言

災害は社会を映し出す鏡

池田 恵子（いけだ けいこ）さん

静岡大学教育学部教授。静岡県ふじのくに男女共同参画防災ネットワーク、アドバイザー。
防災・災害対応・復興にジェンダー多様性の視点が根づくための調査や研修を行う。

「災害は社会を映し出す鏡」という言い方があります。東日本大震災（2011年）でも、私たちの社会のいろんな姿が映し出されました。

「男女共同参画が根づいていなかった」ことも、映し出された姿のひとつです。東日本大震災の被災地からは、こんな嘆きが聞こえてきました。

●男性中心の避難所運営で、避難者の間に当たり前のように性別役割がでてくる。男性たちが、疲れ切っていても避難所で頑張り続ける。結局、管理的になる。女性はそれに従い、自分をころし、自尊感情がどんどん低下していた。（宮城）

●女性が困りごとを口にできなかった。女性が避難所で衝立や更衣室の事を遠慮していた。津波から2か月も経っていたのに、プライバシーのない状況は改善されていなかった。（宮城）

●仮設トイレに男女区別なく並んで、夜は怖かった。やっぱ、男女分けてほしかった。少し離して建ててほしかった。そのような建て方をした行政は男だから。（岩手）

避難所の運営組織、仮設住宅自治会の代表者は、ほとんど男性でした。また、自治体の災害対策本部では、管理職レベルで女性の割合は5％、復興計画策定委員の女性割合は11％にすぎませんでした（内閣府男女共同参画局「男女共同参画の視点による震災対応状況調査」、および復興庁記者発表資料　平成24年6月19日）。

女性の意見が重視されず、更衣室や授乳室、間仕切りもない避難所が多くありました。女性だけが使う生理用品や下着、乳幼児用品（オムツや粉ミルク・哺乳瓶など）、介護用オムツなどが不足しても要望しにくい状況でした。

普段からあるハラスメント、DV（夫婦や恋人など親密な関係の間での暴力）、性暴力は、災害時でも、なくなりません。しかし、安全対策は後回しになりがちで、暴力被害に遭った女性や子どもは相談しづらかったのです。

災害時の子育・介護、家族の世話は、普段の何倍も大変な作業になります。子育てや介護の経験と知恵を備えた女性たちが声を出せないために、必要な環境や物資を整えられず、体調を崩す高齢者や、避難所に居られない家族が続出しました。外部の専門団体などから、必要な支援も受けられませんでした。そのため、子育てや介護をしている男性の困難も相当なものでした。

これらは、災害時だから見られた特別な姿ではありません。普段は見えにくかった、または意識しなかったけれど、もとから社会にあった限界や欠点が、災害をきっかけに映し出されたものです。

静岡県の自主防災組織は、70％が自治会・町内会と同一組織で、98・9％でリーダーが男性です。役員会に占める女性の平均人数は、8・86人中1・24人です（静岡県「平成24年度自主防災組織実態調査結果報告書」）。そもそも自治会長・町内会長のうち女性は1.2％で、全国都道府県の中で下から4番目という低さです（内閣府男女共同参画局「全国女性の参画マップ」2015年）。また、防災訓練などでは、性別による強い役割分担が見られています。その上、地域離れや、担い手の高齢化も進んでいます。

しかし一方で、東日本大震災は、また全く別の姿も映しだしました。

防災を学びたい、防災活動に参加したいという若者や女性が増えています。子育てママ主体の防災プロジェクトや、女性たちによる防災計画見直しや備蓄物資への助言など、これまではなかった活動が見られるようになってきました。地域の防災を男女双方で担う協働の地域防災を目指す自治会も増えています。これもまた、私たちの社会の姿です。

将来、静岡で起こる災害の鏡に、どんな姿が映るのか。災害時であっても、すべての人が自分らしさを発揮して乗り切ろうとする姿であってほしいです。

生きていくこと
―ふるさとを失って―

新間恵子さん（島田市）

結婚を機に２００４年から島田市に住む。ふるさと、福島県双葉郡葛尾村（かつらおむら）は、東日本大震災による東京電力福島第一原発の爆発で、全村避難を強いられた。4年たつ今も母や兄たちは仮設住宅で暮らしている。

信じていた「原発＝安全」神話

２０１１年３月11日午後、津波が東北沿岸の町を飲み込む映像に驚き、新間さんは慌てて福島の実家に電話した。夜、やっと母と電話が繋がり大きな被害がないと知り安堵。その翌日、事態は一転。福島第一原発の水素爆発…まさか！

幼い頃から「原発は安全」と教えられて育ち、疑うことがなかった。それどころか地元で東電は憧れの会社。内定が決まると「東電に入れた」と皆喜び、就職した先輩たちは、いい車に乗った。さらに震災から3日後、今度は3号機が爆発。被曝の危険が迫ったその夜、母から「今から全村避難。2、3日で戻る」と短い電話。その後まったく繋がらなくなってしまった。

事の重大さがずしりとのしかかった。帰る場所を失い、家族に会えず、何も出来ない自分。職場で募金を募り寄付もした。台所で流れる水を眺めている時間さえも苦しかった。事故から2か月後、休みを利用して夫と娘の3人で福島へ向かった。とにかく母や家族に会いたかった。高速道路を北上し、福島に入ったとたん風景は一変。サービスエリアにすら人影がなかった。見慣れた風景は、まるで「死の町」だった。

新間さんのふるさと、福島県双葉郡葛尾村は人口約１５００人、農業と畜産が盛んな山あいの村。新間さんの実家でも数頭の牛を育て、子牛が産まれると名付けて可愛がり、出荷の時期になり牛を売ると、数十万円の収入になる、そんな生活だった。

全村避難の際、家族は牛たちに「すぐ帰るからね」とありったけの餌を与えた。のちに、村中の牛は殺処分された。放射能を浴びた餌を食べた牛は安全面で出荷出来ず、人のいない村では飼育そのものが困難という苦渋の決断だった。近所のおじさんが育てていた牛は、餌桶ぎりぎりまで首を伸ばした状態で餓死していた。

心を失い苦しむ人々

富岡町に住む姉の新築の家は津波で壊され、一帯は放射能の影響で廃墟と化した。もう一人の姉家族は埼玉へ避難。放射能がうつると転校先でいじめにあった。憧れて看護師になった姪は、次々と運ばれた命を救えなかった自責の念から、退職した。

被災体験から見えた事

災害時のボランティア活動の現実と課題

仲田慶枝（よしえ）さん（西伊豆町）

２０１３年7月17日から18日にかけての大雨で、駿河湾に面した西伊豆町田子地区、宇久須地区、安良里地区で豪雨災害が発生。浸水被害や土砂の流出などの大きな被害が出た。その時ボランティアの取りまとめ役を務めたのが「西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会」。代表の仲田慶枝さんに当時の様子を聞いた。

連絡会発足前に起きた災害

2月に西伊豆町で災害ボランティアコーディネーター養成講座が開かれました。それまでは、賀茂地区の講座に1時間かけて通うしかなく不便でした。そこで私たちが独自のカリキュラムを作り、町内で講座を開催することにしたのです。この時の参加者は59人でした」と語る仲田さん。7月30日には、養成講座の終了生を中心に連絡会が立ち上がる予定だった。

それを待たずして、西伊豆町を襲う豪雨災害が発生した。「朝の10時半に（社協）社会福祉協議会から呼び出しの電話が来ました。連絡網すらないなか、養成講座の名簿を頼りに2人で5時間ほどかけて電話をしました。連絡が取れたのは28人。翌日16人が集まりました」。正式な連絡会発足前にもかかわらずボランティアセンターを急きょ開設しなければならなくなった。約10日間の活動期間中、様々な困難にぶつかることになる。幸い人的被害はなかった。しかし高齢化が進む地区ということもあり、泥かき、家の片付けなど、復旧のために人手が必要だった。

「全国からボランティアの電話が殺到し、パンク状態でした。ボランティアセンターの立ち上げ訓練もやっていないなかで災害が起こり、役割分担の方法も決まっていません。午後2時に町長からの要請でボランティアセンターを立ち上げました。しかし社協も人手が足りませんでした」。運営側の人数が足りないなか、受け入れたボランティア数は１１７団体、２４３１人になった。

ボランティアセンターの仕事には（1）各地から来たボランティアの受付け（2）被災地区で必要な作業を聞き取り、ボランティアへ振り分けるマッチング（3）資材の管理（4）ボランティアの現場輸送など、様々な仕事がある。

「賀茂地区の災害ボランティアコーディネーターの会に助けてもらいまし

プロフィール
西伊豆町在住
西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会代表
伊豆半島ジオパーク認定ジオガイド
ふじのくに防災フェロー

あわれな牛の遺体を見たおじさんは、仮設暮らしで昔の面影がないほど太った。出された食べ物を断れないという。

生活の場と糧が奪われた葛尾の人々。土地も牛も仕事もない。散歩も水泳もジムも何をやってもしっくりこない。補償金なんかいらないから村に帰りたいと母はつぶやく。身近には、そういう人ばかりで、新間さんは福島に帰っても知り合いに会わないようにした。「大変だね、頑張ろうね」の次に繋がる言葉がなかった。

「震災だけならこれほど状況は複雑ではない」と新間さんは語る。人間が生み出したものに、人間として「生きる心」を奪われてしまった。被害や補償の違いで内部対立が生まれ、ピリピリした空気が漂い、言葉ひとつに敏感で傷つきやすくなっている。

4年の歳月を経て、今

新間さんは年に1、2度、福島を訪れる。時間制限で村に入ると、除染で草が丁寧に刈られた一帯の風景が、まるでショッピングモールのように整いすぎて違和感を感じる。実家の庭には除染廃土が詰まれ、家の中はイノシシやネズミが荒らした穴と糞だらけ。猫が住みつき畳も膨らみ、とても人が住める状況ではない。しかし兄はいつの日かここにまた家を建てると話す。

「ふるさとが奪われて、本当は全然大丈夫じゃない」と新間さん。原発を安全と信じ、政治やエネルギーのあり方にこれまで特に関心もなかった。原発災害で「生きていくこと」そのものに向き合い、制御出来ないものの良い面と悪い面を自ら知り、選ぶべきだと気づいた。

新間さんは2年前から空手を始めた。自分の考えの限界を越え、今を精一杯生きよう、私より泣いている人がいる、私が落ち込んでどうする、そう思うと強くなれた。あの日からふっきれるまで随分時間がかかった。もう一度頑張っていける、今はそう感じている。

しんま　けいこ
幼い頃から自然の中でたくましく育つ。夫と出逢い、魚屋さんへ嫁いだ一児の母。
たくさんの出逢いが、日々の成長です！

災害と私

た。10数人が応援に来てくれ、支えてくれました」。ボランティアコーディネーター同士の横の繋がりの大切さも話から伝わる。「全国の発災地区に足を運ぶベテランのボランティアさんが、センター内の混乱を承知で待っていてくれたのも助かりました」

周知不足だったボランティアの存在

災害ボランティアに馴染のない住民からは「ボランティアを頼むのにお金は必要？」「活動していたのを知らなかった」「どこに頼めばいいの？」といった声が聞かれた。「『私の家はいいから』、と遠慮する方もいました。隣の家がボランティアによって片付くのを見て、『私も頼みたいんだけど』、とおっしゃる方もいました」。また、発災時の聞き取り調査が不十分だったという課題も残った。

「地元のボランティアコーディネーターは顔見知りということで、聞き取りもやりづらく、頼む方も頼みづらいということがありました。ボランティアの存在を知っていたら頼んだのに、知らなかったから頼めなかったという声もありました」。自治会との連携、日頃からの繋がりが出来ていたらもっと活動がやりやすくなっていただろうと仲田さんは振り返る。

活動してみて、見えた課題

課題は、広報やコーディネーターのスキルの重要性と適正な人員配置である。「被災地区のコーディネーターは5人しかいません。ローテーションを組んで活動しても人手不足で大変でした。土地勘がないとボランティアを活動場所まで連れて行くのも大変でした。地元がわかる人に現地にいてもらえばよかったかもしれません」「ボランティアだから無理しなくていいよ、と言いたいのに現実は違いました。家庭を二の次にして、コーディネーターの活動をお願いする心苦しさもありました」

日頃から社会参加に積極的な女性の参加の方が存在は大きかった。「女性の参加が多かったのですが、男性の役割も重要でした。ボランティアを現地に運ぶためのバスの運転、資材を運ぶ軽トラックの運転、スキルが必要な仕事もありました」

現在、ボランティアコーディネーター連絡会には男性も入会、99人が登録する。また病院、施設、バス会社にも協力を呼び掛け、災害協定を結ぶ。仲田さんは災害ボランティア活動を通して、地域と人を知り、人と人との繋がりの大切さを痛感したという。